2023.7.1 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

7月生まれのマーラーと7月没のバッハ 二大作曲家の名曲を聴く

プログラム

季節は7月になりました。今日は7月にちなんで、7月生まれのマーラーと7月に亡くなったバッハというふたりの大作曲家の名曲を特集します。

ヨハン・セバスティアン・バッハは1685年3月21日、ドイツ、チューリンゲン州のアイゼナッハに生まれ、1750年7月28日にライプツィヒで亡くなった18世紀の大作曲家です。その一族は代々音楽家の家系で、幼少期に父からヴァイオリンを習いますが、10歳の時に相次いで両親を失い、オルガニストだった兄に引き取られます。兄の元で鍵盤楽器の奏法や基礎を体系的に学んだバッハは、急速にその才能を開花し、1707年にミュールハウゼンのブラジウス教会のオルガニストになると、1708年にワイマールの宮廷に仕え、宮廷オルガニストとなり、1714年に楽士長に昇格、毎月1曲の教会カンタータを作曲、演奏までを任されました。1717年ケーテンの宮廷楽長に任命され、ブランデンブルク協奏曲を始め、多くの名作がこの時期に生まれました。新天地を求めたバッハは1723年、ライプツィヒの聖トーマス教会の合唱長、市の音楽監督に就任、ここでマタイ受難曲やミサ曲ロ短調等の傑作が続々と生まれています。バッハは多くのジャンルで傑作を生み、バロック音楽を集大成しましたが、メンデルスゾーン、シューマン、ブラームスといった19世紀の巨匠達にも影響を与えた音楽史上最大の巨匠のひとりです。

グスタフ・マーラーは1860年7月7日、チェコのプラハとウィーンの中間にあるカリシュトに生まれました。父母はユダヤ人の商人でしたが、幼少からの音楽的才能を発揮したマーラーはすぐにピアノを習い始め、1875年にウィーンに行き、高等音楽学校でピアノと作曲、指揮を学びました。1880年20歳の時ハレ歌劇場の夏期シーズンの指揮者を振り出しに、各地の楽団を指揮して名声を高め、1888年、ブダペスト王立歌劇場、1891年、ハンブルク市立歌劇場の正指揮者、1897年にはウィーン国立歌劇場の音楽総監督に就任。ウィーンのオペラ上演史上の黄金時代を築き上げました。作曲では1877年に大学でブルックナーと出会った事が、後期ロマン主義の交響曲のあり方、管弦楽法への理解を深め、後の交響曲作曲家としての才能を開花させる切っ掛けともなりました。第10番は未完ですが、9曲の交響曲と「大地の歌」は、どれもが規模が大きく、声楽を取り入れる手法はマーラー独自の世界を創り上げ、歴史上最も重要な交響曲作曲家として、演奏頻度の高い人気を誇っています。（中川）

＊＊＊＊＊＊＊

ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685～1750）：
無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番ホ長調BWV.1006

イツァーク・パールマン（Vn）
（1982.8.2　ザルツブルク祝祭小劇場でのLive）

二つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調BWV.1043

ヘンリク・シェリング（Vn）／ヨゼフ・スーク（Vn）
ヨゼフ・ヴラフ指揮チェコ室内管弦楽団
（1972.5.26　プラハ、スメタナホールでのLive）

グスタフ・マーラー（1860～1911）：
歌曲集“さすらう若人の歌”

ディートリッヒ・フィッシャー=ディースカウ（Br）
オイゲン・ヨッフム指揮ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団
（1966.11.5　東京文化会館大ホールでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

グスタフ・マーラー（1860～1911）：
交響曲第1番ニ長調“巨人”

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
（1980.3.2　ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/

曲　目　解　説

バッハ：無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第３番ホ長調BWV.1006

バッハの生家は、ドイツ、チューリンゲンに200年近く定住した旧家で、それまでに50人以上の音楽家を排出した大音楽家系でした。バッハはオペラを除くあらゆるジャンルで傑作を残しましたが、無伴奏ヴァイオリンのための3曲のソナタと3曲のパルティータも、その規模や作曲の技巧、表現力など、すべてにおいてこのジャンルの最高峰に位置する傑作です。ケーテンの宮廷楽長をしていた1720年頃に、無伴奏チェロ組曲が完成し、続けて無伴奏ヴァイオリン集が作曲されました。当時の宮廷楽団のヴァイオリン奏者シュピースのために書かれたと伝えられています。これらの無伴奏ヴァイオリン曲は当時、非常に普及していたにもかかわらず、バッハの死後忘れ去られた存在になってしまいますが、この傑作を再び普及させることに貢献したのが、19世紀の名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）でした。ヨアヒムはそれまで埋もれていた自筆譜を発見し、それを原典として印刷楽譜を出すことにより、無伴奏ヴァイオリン音楽を世に知らしめたのでした。無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番は、全6曲中で最も明るく、6楽章構成で形式的にも自由に書かれた名曲で、特に第3楽章のガヴォットは、アンコールなどでたびたび演奏され親しまれています。

★イスラエルの生んだ世界的な名ヴァイオリニスト**イツァーク・パールマン（1945～　　）**の演奏です。

第１楽章　ブレリュード　　第２楽章　ルール　　第３楽章　ロンド形式のガヴォット
第４楽章　メヌエットⅠ、Ⅱ　　第５楽章　ブーレー　　第６楽章　ジーグ

バッハ：：二つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調BWV.1043

バッハはヴァイオリン協奏曲を3曲残しましたが、いずれも1717年から1723年まで、ケーテンで宮廷楽団の楽長をしていた頃に書かれた作品で、二つのヴァイオリンのための協奏曲は、正確な年代は分かっていませんが、第1番、第2番より前の1718年頃ではないかとされています。バッハの年代を分類すると、1708年から1717年までのワイマール時代が「オルガン曲の時代」、晩年1723年から1750年までのライプツィヒ時代が「教会声楽曲の時代」と言われているので、ケーテン時代は「器楽曲の時代」と分類されています。この時代の中心を成していたのは、室内楽、チェンバロ曲、協奏曲でした。ケーテン宮廷楽団には多くの優れた演奏家が集まっていたため、バッハも彼等のために作曲する機会が多かったようで、この協奏曲もそんな中の一曲です。曲は急ー緩ー急の3楽章構成ですが、2つのヴァイオリンは完全に対等で、美しく絡み合いながら進み、緊張感に溢れ引き締まった楽想の第1、第3楽章を挟んで、対話するような美しい旋律美を持つ第2楽章も見事です。

★ポーランド出身の**ヘンリク・シェリング（1918～1988）**、チェコ出身の**ヨゼフ・スーク（1929～2011）**という名手二人の共演でお聴きください。

第１楽章　ヴィヴァーチェ　　第２楽章　ラルゴ・マ・ノン・タント　　第３楽章　アレグロ

マーラー：歌曲集“さすらう若人の歌”

マーラーは、声楽を含んだ長大な交響曲によって、交響曲発展史上、最後に現れた大作曲家でしたが、交響曲と平行して幾つかの歌曲も残しています。1884年24歳の時に書き上げたのが「さすらう若人の歌」です。マーラーは23歳の時カッセル王立劇場の副指揮者になりましたが、この作品は、劇場のヨハンナ・リヒターという女性歌手との失恋が曲に反映されていて、いわばマーラー自身の不幸な恋愛体験に基づく自叙伝的な性格を持っています。先にピアノ伴奏版が完成し、その後管弦楽伴奏用の楽譜が完成しました。初演は1886年カッセルで、管弦楽伴奏版によって行なわれました。この時まだ交響曲は一曲も完成していませんでしたが、1884年頃から着手していた交響曲で、この作品からの引用があり、両曲は兄弟のような関係と言えるかも知れません。恋人に捨てられた若者の悲しみと絶望が、残酷までにリアルに描かれた名曲です。

★ドイツ、ベルリン生まれの名バリトン、**ディートリッヒ・フィッシャー=ディースカウ（1925～2012）**はこの曲を大変得意としていましたが、今回は1966年にベルリン・ドイツ・オペラが来演した折の特別演奏会での演奏で、巨匠**オイゲン・ヨッフム（1902～1987）**が指揮した貴重な録音です。

第１曲　彼女の婚礼の日には　　第２曲　朝の野辺を歩けば
第３曲　私の胸の中には燃える剣が　　第４曲　彼女のふたつの青い瞳が

マーラー：交響曲第１番ニ長調“巨人”

マーラー最初の交響曲は、1884年「さすらう若人の歌」を完成させる頃最初のスケッチが始められ、比較的長い年月を費やして1888年3月に完成しました。初演は当時ブダペスト王立歌劇場の音楽監督であったマーラー自身の指揮により、1889年11月20日ブダペストで行なわれました。この作品は、同じ時期に先行して書かれた「さすらう若人の歌」のいくつかの旋律を共有しています。すなわち第1楽章は第2曲の旋律を主題とし、第3楽章は第4曲からのモチーフが引用されています。初めこの交響曲は第1楽章から第3楽章までを第1部、第4楽章、第5楽章を第2部とする標題が付けられた二部の交響詩として作曲されましたが、第2楽章「花の章」と題されたアンダンテを除外し、さらにフィナーレのコーダ部分を作曲し直し、4楽章の交響曲に改めました。「巨人」というタイトルは、マーラーが青年時代に愛読したジャン・パウルの小説「巨人」からヒントを得たものです。悩み、苦しみ、希望といった青春時代の感情が、みずみずしく溢れんばかりに放出される、若きマーラーの傑作です。

★**小澤征爾（1935～　　）**がベルリン・フィルを振っての名演でお聴きください。

第１楽章　ゆっくりと、引きずるように　　第２楽章　力強い動きをもって、しかし速すぎないように
第３楽章　荘厳に、威厳をもって、しかし引きずらないように　　第４楽章　嵐のような動きで